

〈研究ノート〉

〈Note〉

毘沙吐村の編年史料と絵図

The Chronicles and the Old Maps of Bishado-mura

新 井 健 司

ARAI Kenji

上武大学経営情報学部, 〒370-1393 群馬県高崎市新町270-1

Faculty of Management Information Sciences, Jobu University, Takasaki, Gunma, 370-1393, Japan

受付 2008年1月8日

Received 8 January 2008

© ARAI Kenji 2008

毘沙吐村の編年史料と絵図

新 井 健 司

1. はじめに

群馬県と埼玉県の間境である神流川^{かんな}の下流は、昭和初期まで河道の移動と氾濫を繰り返してきた。筆者は、江戸時代に中山道新町宿にしばしば洪水被害を与えた、神流川の河道変遷について、すでに報告している(新井, 2006)。

この調査により、神流川下流の決壊や溢水がもたらした新町宿の洪水被害の実態を知ることができた。しかし、神流川が烏川に注ぐ合流点付近については、烏川の水も加わることから、より水害が多発する土地であったことを諸文献に見たものの、その詳細を知るには至らなかった。

かつて合流点付近には、毘沙吐村^{びしゃど(びさと)}という村が存在した。毘沙吐村は度重なる洪水被害に悩み、全村移転を余儀なくされたという。その後調査を続ける中で、毘沙吐村の歴史と移転の経緯をまとめた文書2点(大正～昭和期)、及び水害発生後に描かれた多数の絵図(江戸～明治期)が遺されていることが明らかになった。

今後筆者は、江戸期における毘沙吐村の水害史をもとに、神流川・烏川合流点がどのように移り変わってきたかを明らかにしたいと考えている。今回は、その研究を進める上で有用な上記の諸資料をここに報告する次第である。

2. 現在の毘沙吐

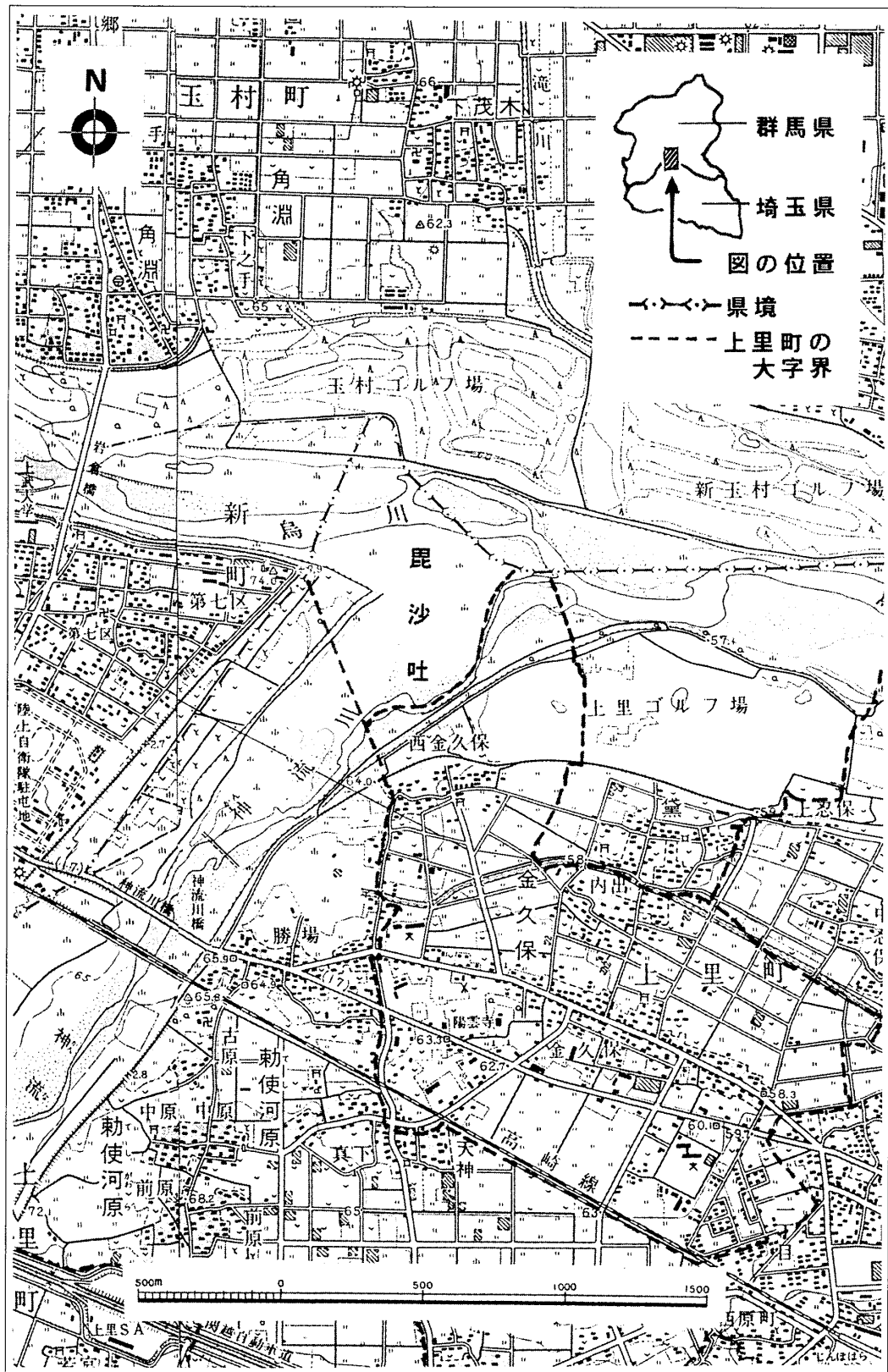
毘沙吐村は現在はなく、その地名は上里町^{かみさと}の字名(埼玉県児玉郡上里町毘沙吐)として残っている(図1)。

現在の毘沙吐は神流川・烏川合流点の西側の東西約700m、南北約1,000mの地区で、東側は上里町^{かなくほ}金久保に、南側は同町^{てしがわら}勅使河原に、西側は群馬県高崎市新町に、北側は同県^{さわ}佐波郡玉村町^{つのぶち}角淵にそれぞれ接している。

毘沙吐には神流川・烏川合流点の上流側の両河川に挟まれた土地の他に、烏川の北側対岸(玉村町側)の一部も含まれる。この区割は両河川の旧河道を県境に定めたことに由来するもので、三角形に張り出した烏川北岸の土地は埼玉県最北端の地である。

現在の毘沙吐は、耕地を含む河川敷の中にあり、全域が砂礫堆積地・草地・雑木林が広がる

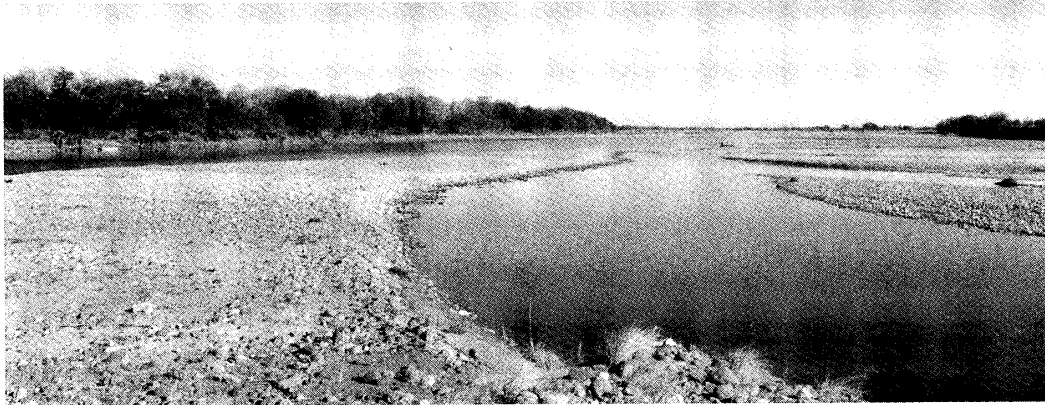
図1 現在の毘沙吐



(国土地理院発行2万5千分の1地形図, 伊勢崎・高崎図幅に加筆)

荒地である。暴れ川として知られた神流川は、昭和初期に堤防が築造されるまでは頻繁に流路を変えて周辺一帯に洪水被害を出してきた。中でも烏川との合流点である当地においては、両河川が増水する度に地形が大きく変わり、周辺の村々は甚大な被害を被ってきた(写真1)。

写真1 神流川・烏川合流点



(神流川下流左岸から見た合流点。遠方左手から中央にかけての流れが烏川。2007年12月6日撮影。)

これまで合流点は西から東へ移動してきたことが伝えられている。上里町の金久保から黛にかけて続く堤防により抑えられている現在でも、毘沙吐地区の地形は絶え間ない変化を見せ、江戸時代の末まで存在したという旧毘沙吐村は、今日では全くその痕跡を残していない(写真2)。

写真2 旧毘沙吐村の現況



(神流川・烏川合流点より神流川上流方向を望む。2007年12月6日撮影。)

3. 毘沙吐という地名

毘沙吐の地名は古くは16世紀の文書に見ることができる。

武田氏朱印状(永禄11年, 1568年)に「先御判之地毘沙吐川井両地」の記述があり、武田信玄が西上野の武士小幡孫十郎に毘沙吐・川井(現玉村町川井)の両地を与えている(上里町史編集専門委員会, 1992)。

神流川合戦(天正10年, 1582年)について記された史料の1つである「深谷記」(作者・作成年代不明)には、「武川(滝川)金窪ひさいと原にて深谷・鉢形・忍衆と出合い切り負け大形打ち死に仕る」という記述がある(上里町史編集専門委員会, 1996)。

また、北条家朱印状(天正15年, 1587年)には「毘沙吐右衛門尉女子」および「毘沙吐右衛門女子」と記されている。この朱印状により、那波郡(現伊勢崎市)付近に勢力を持っていた那波氏が、家臣もしくは家臣の近親者を証人(人質)として厩橋城に差し出し、詰めさせていたことがわかる。この文書上の人名は那波氏の家臣であり、当時毘沙吐を名乗る武士が存在したことが知られる(上里町史編集専門委員会, 1996)。

さらに天正19年(1591年)には、川窪与左衛門尉信俊が徳川氏より加美郡の内「久出」など4カ所1,077石余を含む1,618石余をあてがわれている。上里町史編集専門委員会(1996)は、この「久出」を「びしゃど」と推定している。

以上の通り、少なくとも16世紀には毘沙吐もしくはそれに近い読み方の地名が存在したとみてよいであろう。文禄4年(1595年)には、金窪村から独立した村になった。その後変動はあったようであるが、元禄年間以降江戸時代を通じて「毘沙吐村」の村名が文書に記されている。

地名の由来は不明であり、過去にどのように発音されていたかも正確にはわからない。現在でも「びしゃど」もしくは「びさど」と呼ばれ、文献・地図類のふり仮名も統一されていない。

4. 毘沙吐村の歴史を伝える資料

1) 「毘沙吐誌資料編年譜」

毘沙吐村が神流川・烏川合流点における度重なる氾濫に苦しみ、ついに江戸時代末に新町側に全村移転したことは、多くの文献に記されている(新町町誌編纂委員会, 1989他)。

筆者は、神流川下流の河道変遷の調査を実施する中で、「毘沙吐誌資料編年譜」という文書の存在を知った〔新町町誌編纂室編「新町町誌資料目録」(1989)に掲載〕。

この著作は、新町の松浦 英氏が毘沙吐村の歴史に関する複数の古文書について原文を書写、あるいは内容を記述したもので、日本史上の主要な出来事とともに編年体の体裁で編まれた大部の書である。同書は、ペンで書かれた原稿用紙が上・中・下の3巻に分けて綴じられたもので、表紙には元厚生大臣鶴見祐輔氏、前新町長茂木伝八氏、前町史編纂委員長笛木玄次郎氏(肩書きの「町史」には、現在刊行されている「新町町誌」と異なり、「史」の字が用いられている)の3名の監修印が押されている(写真3, 写真4)。

残念ながら作成年代が記されていないが、筆者は使用されている原稿用紙および監修者

写真3 毘沙吐誌資料編年譜(中巻)の表紙

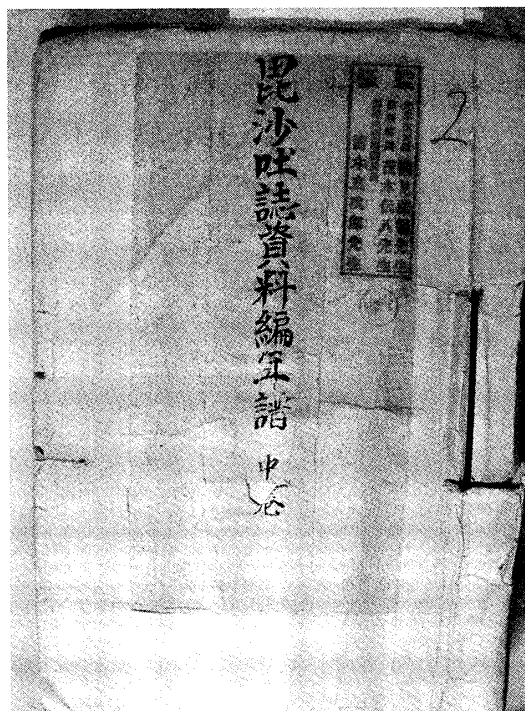
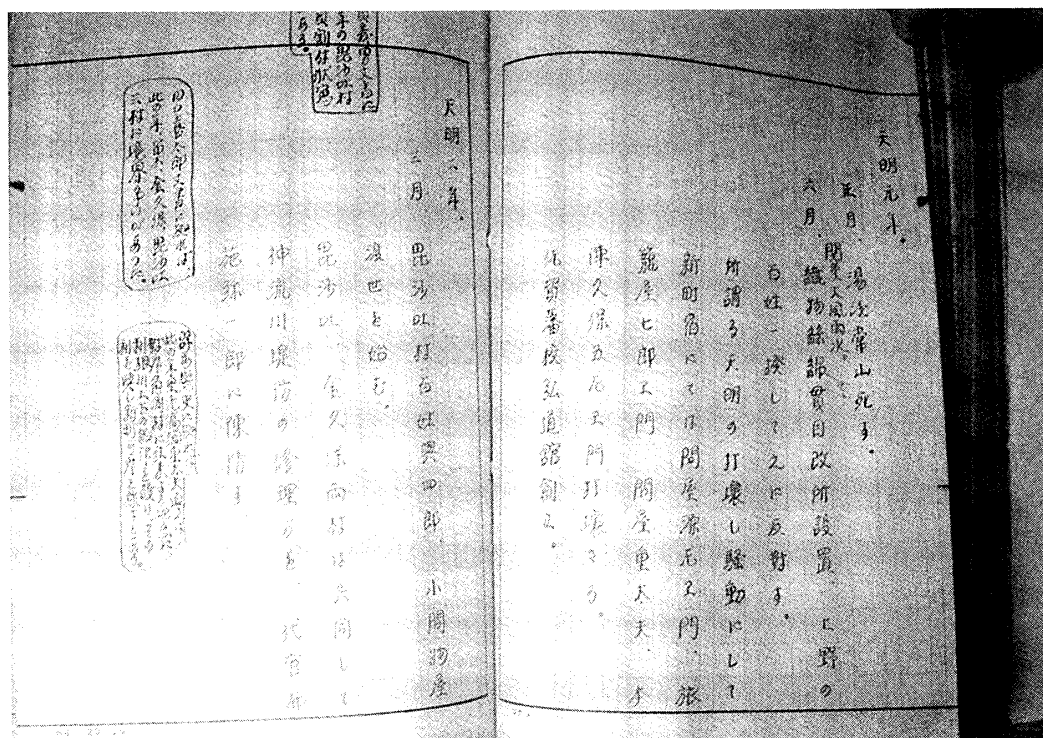


写真4 毘沙吐誌資料編年譜(中巻)の本文例



の国政・町政における職歴をもとに、同書が昭和35年3月から昭和38年4月までの間に作成されたものと推定した(公刊はされていない)。【注】

記載内容は極めて詳細で、随所に朱書の補遺が挿入され、多年の調査に基づいて執筆されたことがわかる労作である。神流川・烏川両河川の河道移動に伴う村や宿の境界の位置を巡って、毘沙吐村と近隣の村・宿との間に発生した争論や川欠^{かわかけ}（河川浸食）の際の川除^{かわよけ}普請^{ふしん}（護岸工事）に関する文書等多数の資料が掲載されている。

なお、この書には執筆者名が明記されていないため、新井（2006）141頁の参考資料では、「執筆者不明」とした。しかし、その後同書の一部の頁に「松浦英写真書」の押印があることを発見し、さらに新町町誌編纂室編『新町町誌資料目録』（1989）の中に記載されている「毘沙吐編年譜」（「毘沙吐誌資料編年譜」を指すものと判断）に、「松浦英写」と記されていることを確認した。以上のことから、今回はこの資料の執筆者として、松浦 英氏の名前を挙げることにした。

2) 「毘沙吐沿革」

新町の本多夏彦氏が毘沙吐村の起源から移転に至る通史を記述した書である。「毘沙吐誌資料編年譜」同様、原稿用紙を綴った11頁の手記で、公刊はされていない（全1巻）。

「新町史編纂委員会」の専用原稿用紙を用い、「大正七年稿完」と記されていることから、大正期の町史編纂事業の一環として作成されたものと推測される。

3) 茂木藤太郎家所蔵絵図^{もてぎとうたろう}

『上里町史通史編』の付図として江戸期の絵図が8枚掲載されており、その中の1枚に茂木藤太郎家所蔵の宝暦11年（1761年）「毘沙吐村・新町宿地論絵図」があった。そこで、筆者は新町の故茂木藤太郎家を訪ねてみた。

茂木藤太郎氏は旧毘沙吐村住民の子孫で、同氏宅には多くの古文書が残されており、中でも毘沙吐村関係の絵図は貴重なものである。藤太郎氏自身も毘沙吐村の歴史をはじめ、郷土史研究に非常に熱心な方であったという。そのために貴重な史料が現在まで伝えられているのであろう。

絵図は江戸時代元禄期以降、大きな水害の度に作成されたものである。中には広げると8畳間を占めるほどの大きさの絵図もあり、毘沙吐村の家屋・耕地の位置や所有者名から洪水時の被害状況に至るまで精細な筆致で描かれているものが多い。方位・距離等技術的に精度の高いものもあり、河畔の地形変化や被災範囲等が色や模様で識別できる。さらに、被災前の状況を描いた図上に被災後の状況を描いた付紙を付け、水害の前後の変化がわかるように工夫されたものまである。

これらを手にとると、災害の実態を技術を駆使して図面に遺そうとした当時の人々の思いが、数百年もの時を経ていながら伝わってくる（写真5, 6）。

写真5 茂木藤太郎家所蔵絵図の1枚 [A] (部分)

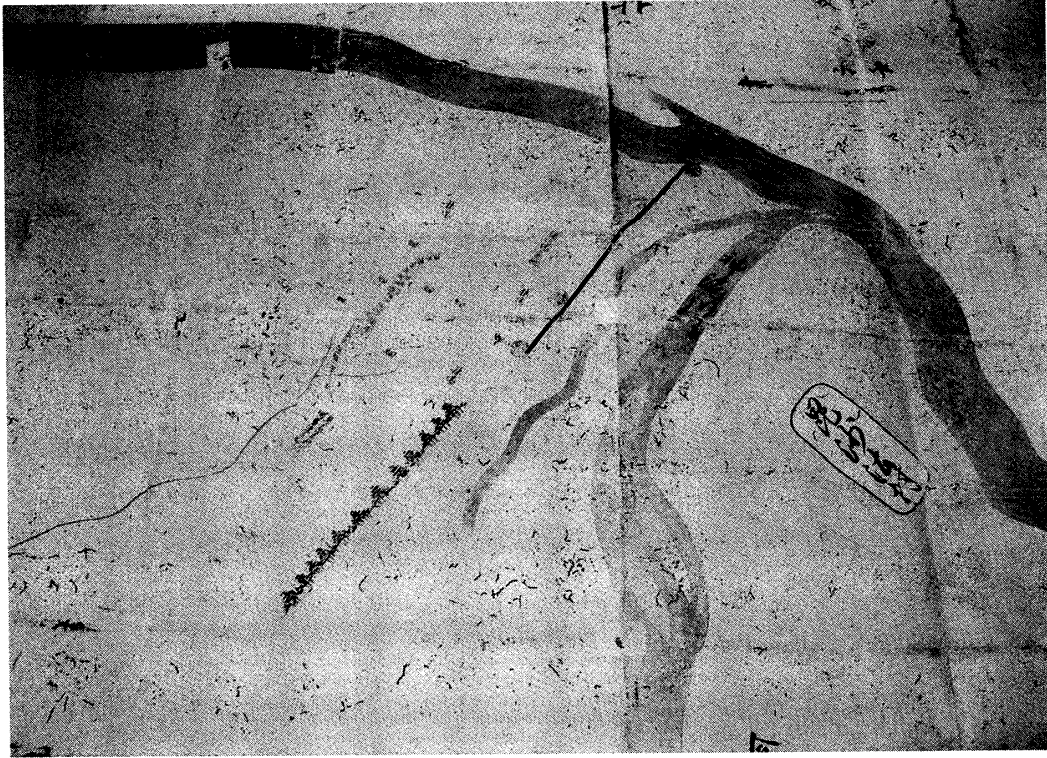
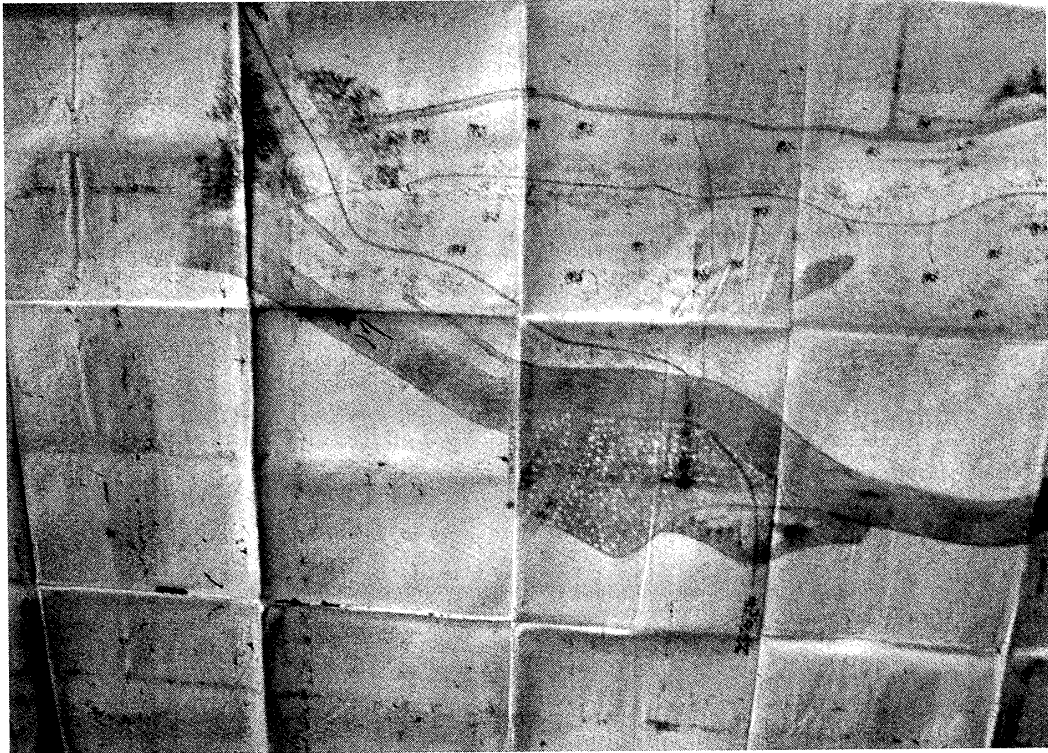


写真6 茂木藤太郎家所蔵絵図の1枚 [B] (部分)



5. おわりに

以上の諸資料は、いずれも高い資料的価値があるにもかかわらず、これまで研究資料としてあまり活用されていない。筆者は今後、地形発達史的視点に立った「神流川・烏川合流点の変遷」の研究に、これらの資料を有効に利用したいと考えている。

「毘沙吐誌資料編年譜」・「毘沙吐沿革」の両書は、原本のみの手記であるが、幸い多野郡新町公民館（現高崎市新町公民館）に保管されていた。特に「毘沙吐誌資料編年譜」は多くの史料・文献を渉猟しており、それ故、この書は毘沙吐研究のための資料目録としての意味を持つものとなっている。そこに採られた史料の一部は、現在群馬県立文書館に収められているが、現時点での所在が明らかでないものもある。この「毘沙吐誌資料編年譜」をもとに、同書に掲載された史料が再確認されることが望まれる。本稿では新たに、「毘沙吐誌資料編年譜」・「毘沙吐沿革」を参考にして諸資料を見直し、再度「神流川下流周辺地域の歴史」年表の作成を試みた（表1）。

また、茂木藤太郎家所蔵絵図は、その質・量共に非常に資料的価値が高いものである。代々の所蔵者の努力により、現在は彩色も鮮やかで良好な保存状態ではあるが、虫喰いが進んでいるものもあり、今後の劣化が懸念される。

残念ながら、県・市・町等地元関係機関の、こうした貴重な資料への関心は十分に払われているとは言い難い。資料目録の整備はもとより、安全に管理し、研究・教育に役立てて後世に遺すための施策、例えば管理している個人所有者への援助や提言、確実な保存のための複製制作等について、関係機関が早急に検討されることを願って止まない。

表1 神流川下流周辺地域の歴史

西暦	元号	記 録
1568	永禄11	武田家朱印状に先御判之地毘沙吐川井両地の地名が記載される。
1582	天正10	神流川原で滝川一益と北条氏が戦う(神流川合戦)。深谷記に「ひさいと原」と記載。
1587	天正15	北条氏家朱印状に「毘沙吐右衛門尉女子」・「毘沙吐右衛門女子」と記載。
1591	天正19	川窪信俊(武田信玄甥)、徳川家康より久出(毘沙吐)など4ヶ村をあてがわれる。
1655	承応4	毘沙吐村の検地がある。
1659	万治2	神流川大洪水のため、新町宿内に濁流が流れ込み、伝馬屋敷が崩落する。この頃藤ノ木河岸成立。
1678	延宝6	大洪水のため、毘沙吐村藤ノ木河岸が壊れ、河岸場を黛村に移す。
1698	元禄11	川窪村より、毘沙吐村が分村。以後村役人を置く近世的な村として存続。家数59軒。
1700	元禄13	笛木新町・勅使河原の境界を神流川中央と定める。
1702	元禄15	毘沙吐村・上野国川井村・角瀬村との間に国境論争があり、烏川中央が国境と定まる。
1715	正徳5	神流川渡船場が移ったため、目印の燈籠建立願が出される。
1717	享保2	戸塚川が氾濫し、そのため新しい川ができる。
1724	享保9	神流川大洪水のため、堤防が決壊し、川瀬が変わる。
1727	享保12	神流川・烏川氾濫し、見通燈籠が流される。畑の崩落・土砂の流入あり。
1737	元文2	神流川の大洪水で大被害。濁流田畑を呑む。新町宿役人、復旧工事方法を書き残す(従来の「籠出し巻き籠」より「手堅巻き敷き籠」と「乱杭」などが効果的)。
1738	元文3	6月末、神流川が増水。笛木新町では、前年より行っていた工事箇所のうち75間(約135m)の敷き籠や乱杭が破壊され、工事現場が本流になる。洪水が静まった後も川瀬が少しずつ宿の方へ近づき、田畑を押し流す。笛木新町、神流川の氾濫と水防工事の状況を絵図にして、代官に届ける。
1742	寛保2	神流川大洪水で新町宿内に泥流が流入、中山道が堀割と化す。死者54人、流失家屋97軒。水深は神流川で4.5m、町中で2.4m、田畑で2.1m。藤ノ木河岸被害。
1745	延享2	落合新町、土地の状況を絵図にして、代官に届ける。毘沙吐村と境界を争う。
1748	延享5	神流川満水(1月)。
1752	宝暦2	笛木新町、神流川の氾濫と水防工事の状況を絵図にして、代官に届ける。
1761	宝暦11	笛木新町、水難(2月)。毘沙吐村と境界を争う。
1762	宝暦12	関東の諸河川大満水。金久保・毘沙吐・笛木新町の間で上州・武州の国境論争。国境が川の中央であることを前提にした上で、三分境の皂莢(サイカチ)の木より北東を見通して、烏川の川端に境杭(「三境定杭」)を立て、それを基準に国境を決定。
1772	明和9	毘沙吐村、上野国島村及び武蔵国上仁手・下仁手・山王堂・新井4ヶ村との入会川漁許可について訴える。
1781	天明1	関東暴風雨。神流川土橋修復につき、三右衛門、費用百両上納利金をもって、修復・川浚い・無賃渡舟通行。
1782	天明2	毘沙吐・金久保・勝場3ヶ所神流川筋変動につき、訴訟。神流川満水につき、下河原・陣馬御普請、毘沙吐村川除普請あり。藤ノ木河岸の対岸に新町河岸できる。神流川メ切普請で、毘沙吐村他と新町出入(5月)。
1783	天明3	浅間山大噴火。烏川大洪水のため大飢饉となる。新町宿の降灰30cmに達する。
1791	寛政3	神流川洪水により、毘沙吐村、土地を流失する。神流川本瀬が金久保村字西久保北裏耕地に流入する。毘沙吐村の一部の住民が笛木新町下河原に移転。
1795	寛政7	当時、神流川の川幅、平時10間(約18.2m)。長さ10間、幅1尺4寸(約3m)の土橋あり。増水時に土橋は外され、人足によって渡る。水が引き川幅が20間(約36.4m)以下になると、渡し船を出す。歩行船1、馬船1。勅使河原村が担当。
1802	享和2	6月末、烏川・神流川氾濫。落合新町の人家半数、10町歩の田畑が浸水する。堀割りを作り、滞留した泥水を排水。伊能忠敬、翌年にわたり新町宿を測量す。
1805	文化2	国境出入。神流川洪水につき人馬差出年延願を出す。
1808	文化5	神流川渡船場所に見通燈籠建立願を出す。

1809	文化6	伊能忠敬、新町・金久保間を測量する。
1815	文化12	神流川兩岸に石燈籠が建立される。
1816	文化13	毘沙吐村・笛木新町宿の村境再検分。
1819	文政2	毘沙吐村、角瀨村を相手取って地論。毘沙吐村が勝訴。
1822	文政5	神流川・烏川、川筋移動により、毘沙吐・新町・角瀨の間に境界争論あり。
1824	文政7	2度の洪水があり、家屋多数浸水する。
1829	文政12	神流川出水にて、毘沙吐村新町地内借り、川除普請あり。
1846	弘化3	6月、大洪水で毘沙吐村の社寺・民家・土地の大半が流失。家屋24軒、土蔵6棟流失。新町側への移転願あり。7月、神流川本庄方面へ抜け、野や畑が一面に浸水。毘沙吐村の全民家水浸しとなり、泥土砂石押し入り全くの廃墟となる。
1847	弘化3	大洪水で河岸町の社寺・民家が流失する。弘化3年の川欠箇所復旧工事成る。
1848	弘化5 嘉永1	1月、神流川洪水。毘沙吐村川欠。4月、移村絵図面許可願を提出。毘沙吐村の新町内への移住始まる。11月、大部分の村民の移住が完了。毘沙吐村宗門人別帳あり。
1852	嘉永5	3月、金久保・黨・毘沙吐3ヶ村境杭打替議定書を作成。7月、川々出水。
1856	安政3	神流川が氾濫し、毘沙吐村被害にあう。4軒流失。
1857	安政4	毘沙吐村の新町への移住。神流川河岸に常夜燈を再建。
1858	安政5	毘沙吐村より諏訪神社を遷宮。神流川、藤ノ木河岸前より本庄方面へ流れる。
1859	安政6	洪水のため米不作。酒造高が半減する。7月、新町宿、上入口より家13軒流出、烏川堤南を流れ、3人死す。宿は川同様に激流が流れ、上州屋佐惣次の家は下町の高札まで流れる。移転した毘沙吐村の家も8軒流失したが、元の村には不思議なことに水が上がらない。8月にも出水。
1863	文久3	神流川の洪水で流出した大量の土砂により、毘沙吐村が河川敷になる。藤ノ木河岸も全壊。
1868	明治1	新町宿・毘沙吐村、岩鼻県へ編入。
1869	明治2	毘沙吐村明細帳あり。これによると、当時家数66軒。
1870	明治3	毘沙吐・勅使河原両村、金久保村を相手取り共同で出訴。
1871	明治4	廃藩置県。第一次群馬県成立。
1872	明治5	笛木新町・毘沙吐村・金久保村の境界を定める。
1873	明治6	角瀨・下之手両村が毘沙吐村・新町を相手に村境論争。
1874	明治7	笛木・落合・毘沙吐・角瀨の境界論争裁定成る。繫杭38本を立てる。
1876	明治9	第二次群馬県成立。新町は群馬県に、毘沙吐村は埼玉県に編入される。
1879	明治12	毘沙吐村、新町に転籍し、川岸町と改称。
1888	明治21	笛木、落合、藤ノ木の旧字名を廃し、新町と称す。
1891	明治24	神流川見通燈籠、高崎市大八木に移る。
1910	明治43	大洪水。烏川上流の森新田村の堤防が破堤し、新町出水。県下各川はいずれも20余尺増水。人名家禽の流失夥し。烏川上流の破堤150間。
1914	大正3	暴風雨により、川岸町の堤防決壊。
1917	大正6	町名変更(区制施行、1～7区)
1934	昭和9	国道17号、神流川に永久橋竣工する。
1935	昭和10	県下に大水害。
1940	昭和15	陣馬(現陸上自衛隊新町駐屯地)で、応永の板石塔婆2基と観音像1体発掘される。
1949	昭和24	12月9日、川岸町住民、毘沙吐村移転百年祭を執行。
1955	昭和30	新町に8～10区を追加
1961	昭和36	新国道17号線、神流川橋梁―新町駅間竣工する。
1965	昭和40	神流川古戦場跡の碑を建立する。
1969	昭和44	中河原、下河原、水押地区土地改良事業完成。
1978	昭和53	常夜燈、ライオンズクラブにより復元。

本年表は、主として以下の資料をもとに編集した。

- | | | |
|----------------|---------------|------------|
| 1 毘沙吐誌資料編年譜 | 2 上里町史 通史編 上巻 | 3 上里町史 資料編 |
| 4 新町町誌 通史編 | 5 田口基家文書 | 6 渡辺三右衛門日記 |
| 7 茂木藤太郎家文書 | 8 茂木吉三郎家文書 | 9 内田フミ家文書 |
| 10 新世紀ぐんま郷土史事典 | 11 毘沙吐村沿革 | |

表1の作成の際に参考にした文献によって、記載事項の年代等に相違が多々見られたため、再度諸資料にあたり再編集した。新井健司著「江戸時代中期の新町宿に洪水被害を与えた神流川下流の河川変遷」(2006年, 上武大学経営情報学部紀要29号)124・125頁の表1を本稿の表1と差し換えていただきたい。

【注】

「毘沙吐誌資料編年譜」の作成年代を昭和35年3月から昭和38年4月までの間と推定した根拠は、次の通りである。

著者の松浦 英氏が何故に同書を著わそうとしたのか、いつ頃から調査を始めたのかは不明であるが、松浦氏の郷土愛や戦後、町政に携わった経験が執筆の動機になったとも考えられる(昭和22年4月から昭和30年4月まで新町町会議員2期を務め、この間、昭和22年5月から昭和24年4月までは同町会議長の職にあった)。

まず、「毘沙吐誌資料編年譜」に使用されている原稿用紙についてであるが、戦後のコクヨ社製のものであることから、昭和20年代以降に同書が作成されたことは明らかである。そこで同社に問い合わせたところ、この原稿用紙は昭和35年3月から昭和40年4月までの期間内に製造された商品と思われる、との回答を得た。

さらに、作成年代を絞り込む鍵は表紙に押された監修印である。

監修者の一人である鶴見祐輔氏には、「元厚生大臣」という肩書きが付けられている。鶴見氏が厚生大臣を務めたのは、昭和29年12月から昭和30年3月までの第一次鳩山内閣である。この肩書きには「元」が付くことから、同氏より3代目以降の厚生大臣が属した内閣、即ち第三次鳩山内閣(昭和30年11月～昭和31年12月)以降の時代にこの印が作られたと考えられる。

また、鶴見氏とともに監修者に名を連ねる茂木伝八氏の肩書きは「前新町長」であり、「前」が付くことから、次期町長の時代の人がこの肩書きを茂木氏に付けたと考えられる。茂木氏は、松浦氏の町会議員就任と同じ昭和22年4月に町長に就き、昭和30年まで2期8年町長を務めている。茂木氏の次の町長は小林莊平氏で、昭和30年4月から昭和38年4月まで2期8年務めている。

小林町長の在任期間のうち、昭和30年4月から同年11月(21日)までの間は第二次鳩山内閣であり(同内閣はすでに3月19日に組閣されている)、鶴見氏の「元厚生大臣」の肩書きは使えないことになる。「元厚生大臣」と「前新町長」が並記された時期は、小林町長の在任期間から上記の期間を除いた期間内ではない。

したがって、印が作られたのは昭和30年11月(22日)以降ということになる。「元」の場合は、肩書きを付ける人が3代目以降の時代ということで限度はないが、「前」の場合は次期に限られるので、この肩書きが使えるのは小林町長の任期満了時までということになる。

3人目の監修者、笛木玄次郎氏は茂木氏の前任町長で、昭和9年8月から昭和21年11月まで長く町長の職にあった人物である。監修印では「前町史編纂委員長」の肩書きであるが、当時の町史編纂事業については現在不明で、監修印の作製年代を知る手がかりにはできない。

このように監修印に関しては、昭和30年11月(22日)から昭和38年4月までの期間に製造された可能性を考えることができる。しかし、昭和35年3月より前には、「毘沙吐誌資料編年譜」に使用された原稿用紙が未だ製造されていないので、同書への押印はあり得ない。したがって、昭和35年3月以降、昭和38年4月までの間に同書が執筆され、その後に監修印が押されたものと思われる。

以上の原稿用紙と監修印に関する事実に基づき、「毘沙吐誌資料編年譜」が作成された時期を、昭和35年3月から昭和38年4月までの3年2ヶ月の期間と推定した。

なお、国会議員として活躍した鶴見祐輔氏は、プルタークの英雄伝の翻訳も行った、歴史に造詣の深い文筆家であり、また、群馬県に縁のある人物ということもあって、監修を依頼されたものと思われる。彼の出生地には、岡山県とする説と群馬県とする説がある(「群馬県百科事典, 昭和54年上毛新聞社刊」では、「多野郡新町に生まれた」としている)。

謝 辞

本稿の執筆にあたり、下記の方々にご協力いただいた。

群馬県多野郡新町公民館(現群馬県高崎市新町公民館)の職員の方々には、旧毘沙吐村に関する文書を閲覧させていただいた。

埼玉県児玉郡上里町立郷土資料館副館長の^{まとお}外尾常人氏からは、旧毘沙吐村周辺地区の考古・歴史に関するお話を伺い、資料を提供していただいた。

埼玉県児玉郡上里町文化財保護審議委員の小野英彦氏からは、旧毘沙吐村の歴史のお話とともに、地元所蔵資料に関する情報について御教示いただいた。

群馬県高崎市新町3145の故茂木藤太郎氏夫人の茂木はる子氏および女婿の茂木 進氏からは、同家が所蔵する毘沙吐村の絵図の閲覧を快諾していただいた。

コクヨ株式会社(大阪本社)には、原稿用紙の製造年調査をしていただいた。

以上の方々に厚く御礼申し上げます。

参考文献

新井健司 2006.「江戸時代中期の新町宿に洪水被害を与えた神流川下流の河道変遷」

上武大学経営情報学部紀要 第29号 119-142

上里町史編集専門委員会 1992.『上里町史 資料編』上里町

上里町史編集専門委員会 1996.『上里町史 通史編 上巻』上里町

新町町誌編纂委員会 1989.『新町町誌 通史編』新町教育委員会

参考資料

新町町誌編纂室 1989.『新町町誌資料目録』多野郡新町

本多夏彦 1918. 「毘沙吐沿革」(手記, 高崎市新町図書館蔵)

松浦 英 (推定1960-1963) 「毘沙吐誌資料編年譜 上巻・中巻・下巻」(手記, 高崎市新町図書館蔵)

絵図

茂木藤太郎家所蔵絵図 (複数, 年代・図名等現在調査中)